

『散文トリスタン』における回顧的物語の構造化の一側面

嶋 崎 陽 一

フランスでは十三世紀初頭から始まった散文形式による騎士道物語、特にその中でもアーサー王関係の文学作品の流れにおいて、『散文ランスロ』（以下『ランスロ』と略す）とその続編となる『聖杯の探索』、『アーサー王の死』が最初の大きな達成の一つとなったということは、今日ではまず疑いようのないことであると思われる。これはまず内容的には、十二世紀にクレチアン・ド・トロアによってアーサー王文学に導入された聖杯というモチーフと、アーサー王宮廷の盛衰との有機的な統合ということなどが挙げられるが、それ以上に注目に値するのは、これらの作品、なかでも『ランスロ』が見せる、形式、構造面での達成である。クレチアンによって物語作品の構成に導入され、以後の物語作品において、多かれ少なかれ意識的に活用されてきたいくつかの文学的技法が、『ランスロ』では、形式的に非常に整理され、かつシステムチックに用いられることで、一つの規範ともいべきかたちを獲得することになる。

この『ランスロ』の直後に書かれた、同じ十三世紀の長大な散文物語『散文トリスタン』（以下『トリスタン』と略す）¹⁾については、近年の van Coolput の研究¹⁾以来、現代のわれわれの目から見て、一見非常に冗長かつ乱雑なそのテキストが、書法、思想ともに『ランスロ』の影響を大きく受けたうえで、ときにそこで打ち立てられた規範に追随し、またときに反発しながら、どれほどの綿密な意図をもって構成されているか、ということが問題とされるようになった。本論文では、筆者が今まで『ランスロ』について検討してきた問題の一つを『トリスタン』について考え、『トリスタン』の書法の一側面の整理を試みたい。検討するテキストとしては、Droz 版『トリスタン』のうち、第2巻と第3巻を題材とする²⁾。

『ランスロ』において確立した物語書法として、一般に「回顧的物語」*récit rétrospectif* と呼ばれる技法がある。この回顧的物語の形式について、A. Micha は次のように言っている。「もっともよく見られる典型的な図式は、試練、救助、解放、決闘といった行動に、解放、救済した者に問いかけられた人物による状況説明が続く、というものである。³⁾」ある出来事が起こったときに、あるいは由来ある何ものか、状況かに出会ったときに、それに対する説明がときに作中人物から、またときには物語の語り手から与えられるというかたちで、物語の現在時から一歩後退した過去の出来事が、ひとつの独立したエピソードとして挿入されるのが回顧的物語で、『ランスロ』ではこの技法をシステムチックに採用していて、作品の随所にこの形をもって挿入されるエピソードが見られる。

『ランスロ』では、この回顧的物語の形式を構造化するための書法も、やはりシステムチックに整理されたものとなっている。特に回顧的物語を導入するためのディスコースは、その形式的な構造が明瞭にみとれる。⁴⁾

... et li dus li commande a dire de quel gent cele desconfiture avoit esté, et cil dist qu'il li dira, mais qu'il n'i ait plus garde, et li dus l'en aseure. 《Sire, fet li vaslés, voirs fu que la dame de Cabrion aloit a Londres a la cort por veoir le roi qui ses cosins est qu'ele n'avoit pieça veu: *si nos avint que* nos encontrames en ceste lande jusqu'a .XX. chevaliers armés, si passames oltre et il autresi, sans araisonier les uns les autres. [...]

伯がどのような人々によってこれほど打ち負かされたのか〔盾持ちの小姓に〕訊ねると、彼は、命ばかりは助けてくれるなら、それを言ってお聞かせしましょうと言った。伯は約束し、小姓は言った。「殿、真実のところ、カブリオンの奥方が長いことお会いしておられなかった従兄弟である王のもとにお会いに、ロンドンに行こうとなさいました。そのとき起こったことですが、私たちはこの荒地で二十人もの武装した騎士に出会い、言葉をかけ合うこともなくお互いに行き過ぎようとなりました。[……]

(*Lancelot*, XVI, 2-3; ⁵⁾ 強調は筆者)

ここで挙げた例は、もっとも典型的なものであるが、物語の現在時から回顧譚への移行は、まず語りのレベルの移行を示すフレーズ、次に過去の状況についてのディスクール discours circonstanciel⁶⁾、それから過去の事件や出来事を語るディスクール discours événementiel⁷⁾という、三つの段階を踏んで行われ、それぞれは固有の機能を担った定型表現によって明瞭に構造化されている。語りのレベルの移行を示すのは、cil dist qu'il li dira「彼はそれを言ってお聞かせようと言った」といった、dire, oïrなどの発話 énonciation に関する動詞を含むフレーズである。過去の状況についてのディスクールの開始を示すのは il fu voirs que という表現とそのヴァリエーションで、「真実のところ」と、これから語られる物語の真実であることを保証する、あるいは保証すると主張するための表現がもちいられる。そして最後に、過去の事件を語るディスクールが、il avint que「そのとき起こったことだが」ないし時間的要素をもつ節、句などで導入される。

こうして語り始められる回顧譚のエピソードは、『ランスロ』においては、導入される契機となった質問、話題についての説明が終わった時点で終了し、過去への移行が始まった時間へと回帰する。その回帰の部分は、回顧譚の開始部分ほどではないが、やはりある程度定型化された表現で示される。

《*Einsint furent tuit li nostre que mort que navré ne ja ne sai que ma dame meesmes est devenue, kar ele se feri el bois, quant ele vit la grant perte de sa gent.*》

A ces paroles virent saillir une pucele hors del brueil [...].

「このようにしてわれらは、あるいは死に、あるいは大けがを負いましたが、奥方がどうなされたのか私は存じ上げません。奥方は手の者が大敗したのを見るや、森の中へと入ってお行きになったものですから。」

その言葉が終わったところで、茂みの中から娘が一人とびだしてくるのが見えた。

(*Lancelot*, XVI, 5)

ここでは、問われた質問 *de quel gent cele desconfiture avoit esté* 「どのような人々によってこれほど打ち負かされたのか」に対する答えのまとめとしておかれた *einsint furent tuit li nostre que mort que navré* 「このようにしてわれらは、あるいは死に、あるいは大けがを負いました」が、語られた過去の挿話の終わりを示し、さらに *a ces paroles* 「その言葉が終わったところで」が話者の台詞から地の分への以降を示している。この二つの役割は、ときにどちらかが省略されることもあるが、とくに作中人物によって回顧的物語が導入された場合には多くの場合においてこうした終結の形式がみられる。

『トリスタン』での回顧的物語導入の形式については、その特徴からいくつかに分類することができる。まず第一に、『ランスロ』における定型をきちんと踏んでいるものだが、

《*En non Dieu, sire cevaliers, fait mesire Tristrans, vous me dites merveilles ! Et comment vous vint si grans volentés de moi veoir que vous en tel travail vous en meïstes ? — Certes, fait li cevaliers, je le vous dirai, puis que vous le volés savoir. Or saciés, mesire Tristran, k'il n'a mie encore granment de tans que je estoie en la maison le roi Artu, ki m'avoit fait adonc cevalier tout nouvelement, et tant que nous conmenchames a parler entre nous, et privé et estrange, des aventures [...].*》

トリスタン殿は言った。「神に誓って、騎士殿、たいへんなことをお聞きしたものです。これほどの苦勞をしてまで私にお会いになろうとなされたのはどうしてなのですか？」騎士は言った。「お知りになりたいとのことですから、申し上げます。お知りおき下さい、トリスタン殿、少し前のことですが、私はアーサー王の宮廷にいました。ついさきごろ王は私を騎士に叙任して下さったのです。そうして私たち【騎士たち】は一緒に内外のさまざまな冒険について語り合い始めました。[……]」

(*Tristan*, t. II, pp. 82-83, § 14 ; 強調は筆者)

ここでは、回顧譚の開始が、先程述べた『ランスロ』の場合と同じ、あるいは類似した表現によって示されている。まず発話に関する動詞を含む文 *je le vous dirai* 「あなたに申し上げます」、それから *or saciés ke* 「お知りおきください」という、次にくる言説の真実性を保証しようとする表現、それから *tant que*、これは『ランスロ』でも見られる慣用句であるが、状況を述べるディスクールから出来事を述べるディスクールへの移行を標示する機能を担っている。こうした明瞭な構造化の手法というのは、おそらく『ランスロ』の影響を大きく受けていると考えてよからう。

ところが、こうした明瞭な構造化への指向を見せるものとは別に、構造化の機能を担う表現を含まないと思われる回顧的物語も、『トリスタン』には数多く見られる。

Ensi dist Gouvrenaus que cele damoisele estoit mauvaise et de ce disoit il verité. Ele estoit sans faille des damoiseles de Morgain. Et Morgain avoit tout nouvelement bastie une trahison, et vous dirai quele ele estoit : Morgain, sans doute, estoit tant iree et tant dolante du grant damage que mesire Tristrans li avoit devant ier fait de ses cevaliers que

a poi qu'ele ne perdoit le sens. Ele quidoit bien tout certainement que Lancelos li eüst cest damage fait. De monsigneur Tristan ne se prenoit ele regart, car ele quidoit vraiment qu'il fust en Cornuaille. Ele avoit ore une autre fois establis cevaliers dusques a trente quatre et les avoit fais entrer en une soie tour qu'ele avoit faite nouvelement, bele et rice et fort. Après avoit ele pris .X. de ses damoiseles et les avoit envoies par le pais, cascune par soi; et pour ce que on li avoit bien fait entendre quel escu mesire Tristrans portoit icelui jour k'il fist la desconfiture des .XXX. cevaliers, avoit dit Morgain a cascune de ses damoiseles au departir: «Vous le porés a ce connoistre k'il porte un tel escu.» Si lour conmencha a deviser cele meïsmes façon que si cevalier li avoient devisee de l'escu, et puis lour a dit: «Cele de vous ki le trouvera, ne laist en nule maniere qu'ele ne l'amaint dusques a la tour, et par teles paroles li porrés vous amener.» Si lour conmenche a enseigner en quel maniere eles le porroient miex faire.

En tel maniere con je vous di, avoit Morgain atirié comment ele peüst prendre monsigneur Tristan.

そのようにしてグヴェルナルは、その娘がよからぬ人物であると述べたのだが、それは真実であった。彼女は実はモルガンの侍女の一人なのだ。モルガンはさきごろ陰謀を企てたのである。それがどのようなものであったかを申し上げよう。モルガンは疑いもなく、トリスタン殿が先日彼女の騎士たちに成したことで、たいへん怒り、嘆き、そのあまりに正気も失わんばかりであった。彼女はその災厄をもたらした者がランスロであると堅く信じていた。トリスタン殿については、彼がコルヌアイユにいるものと信じていたために、疑ってもみなかった。彼女は今度は騎士たちを三十四人招集し、最近建てたばかりの、美しく、豪華で堅牢な塔に彼らを集めた。その後モルガンは侍女を十人呼び、それぞれを国中に送りだした。トリスタン殿が三十人の騎士を打ち負かした日にどんな盾を持っていたかを聞いていたので、モルガンは出立しようとする侍女の一人ひとりにこう言った。「かれこれの盾を持っているからすぐに見分けがつこうぞ。」そうして騎士たちから聞いた通りの盾の様子を侍女たちに伝えて、続けた。「あの男を見つけた者は、かならず塔まで連れてくるのだ。こうこう言い立てれば彼はついてくるであろう。」どのようにすればよいのかも彼女は侍女たちに教えた。

今私があなたがたに語ったようにして、モルガンはトリスタン殿をつかまえる手はずを整えたのであった。

(*Tristan*, t. II, pp. 178-179, § 72)

これはモルガンが、自分の遣わした三十人の騎士たちを打ち負かしたトリスタンをランスロと取り違える話だが、ここでは、語りのレベルの移行を示す、発話に関する動詞を含む文 *vous dirai quele ele estoit* 「(その裏切りというのが) どのようなものであったか申し上げよう」で過去の物語が導入されるが、そのあとの第2、第3のステップを示す明確な表現は用いられていないようにみえる。

上の引用では、回顧的物語の語り手は作者だが、『ランスロ』においても、登場人物ではなしに物語の語り手自身が回顧的物語を語りだすときには、ある程度の構造化のルーズさがみられる

ことがある。しかし、『トリスタン』では、同じように明確な構造化を欠いている例が、登場人物が話者となった場合にも見受けられる。

《Chertes, sire, fait la damoisele, assés tost le vous puis conter. Mal fust onques enconmenchie chele parole dont si grans damages m'est avenus, car je en sui morte et traïie! Et puis que vous le volés savoir, *je le vous dirai*.

Chil cevaliers, ki chi gist mors en tel guise com vous veés, estoit orendroit ichi deschendus pour ce que lassés estoit et travailliés. Et la u nous reposiom entre nous deus desous chel arbre illuec, *atant es vous que* sour nous vint uns chevaliers armés de toutes armes. Et venoit tous seus sans compaingnie, ne ne menoit avoec lui dame ne damoisele, ne esquier, ne sergant : tous seus aloit et tous seus vint ensi sour nous. Et puis k'il nous ot salués, il demanda a chest chevalier ki chi gist ki il estoit. Et il dist k'il estoit de la maison le roi Artu et cevaliers la roïne Genievre. Quant li cevaliers entendi que chil cevaliers estoit des chevaliers la roïne Genievre, il dist : 《Chertes, vous estes chevaliers de la plus desloial dame du monde et de la plus fausse, pour che vous ferai je honte tout maintenant et en despit de li!》 Et lors li dist : 《U vous monterés, u je vous ferai tout orendroit ensi a pié com vous estes!》 Après chele parole monta chis chevaliers et en tel maniere vinrent as joustes, si fu adonc chis cevaliers ochis de chele joste. Sire cevaliers, ensi rechut mort chis preudom com je vous ai conté, k'il n'i ot nule autre ocoison, ce vous di je pour voir.》

娘は言った。「殿、手短にお話いたしましょう。こんなひどいことが起こったなんて、そのきっかけとなった言葉に災いあれ。私はそのために裏切られ、死ぬような目にあったのですから。あなたがお知りになりたいことを、私はあなたに申し上げます。」

あなたの目の前に死んで横たわっているこの騎士は、ひどく疲れたためにこの場所で馬を降りたのでした。そうして私たち二人があそこにある木の下で休んでいると、そのとき、私たちのところに武具でしっかりと身を固めた騎士が一人やって来ました。その騎士はたった一人、奥方も娘御も、盾持ちも従者も連れずに私たちのところにやって来たのでした。彼は私たちにあいさつをした後で、今そこに横たわっている騎士にあなたは誰かと尋ねました。彼が自分はアーサー王の配下であって、妃グニエーヴルの騎士であると言いました。かの騎士は彼がグニエーヴル妃の騎士であると聞くと、こう言いました。「そなたはこの世でいちばん不実で、いちばん愚かな女の騎士であるのだな。それなら今すぐ、彼女への仕返しにそなたに恥をかかせてやろう。」それから彼は言いました。「馬に乗れ、それともそなたのように馬から降りて徒で戦おうか!」その言葉を聞いてこの騎士は馬に乗り、槍を合わせましたが、騎士はその決闘で殺されました。騎士殿、今お話したようにして、この殿方は命を落としたのでした。これこそがまさにその理由であって、私の言葉に嘘はありません。」

(*Tristan*, t. III, pp. 252-253, § 219-220)

この回顧譚の構造は、先の例とほぼ同じである。回顧譚の前後の、語りのレベルの移行を示すフレーズ *je le vous dirai* 「私はあなたに申し上げます」はあり、*atant es vous* (現代語の

voici, voilaに相当する) という表現も出来事のディスクールの開始を示すように解釈できるが、過去の状況を導入するフレーズ冒頭に、はっきりとしたマークとなるべき定型表現がなにも用いられておらず、回顧譚の冒頭の構造化はかなり希薄になっている。

さらに、『トリスタン』では、私たち現代の読み手からは容易に理解しにくいまでに構造化を全く拒否されているのではないかと思える例もある。やはりトリスタンによってモルガンの配下である三十人の騎士たちが打ち負かされた事件に関する回顧譚だが、

Quant Breüs voit sour lui venir monsigneur Tristran si apareillé de lui ferir, pour ce que il reconnoist l'escu de Cornuaille tout maintenant que il le voit (*et le jour devant avoit il esté chiés Morgain, ki mout li voloit grant bien, et li avoit Morgain conté la grant perte et le grant damage qu'ele tout nouvelement avoit recheü, et par un cevalier. Breüs, ki celui fait n'avoit mie tenu a petit, ains disoit bien tout plainnement que ce estoit une des plus grans merveilles dont il oïst piecha mais parler, avoit demandé quel escu li chevaliers portoit, ki cest damage li avoit fait. Et Morgain li avoit devisé tout ensi con li autre li avoient conté chil ki de pres l'avoient veü. Par les nouveles que Breüs avoit aprises en la maison de Morgain le jour devant, reconnut il l'escu de monsigneur Tristran tout maintenant k'il le vit*); dont il fu plus espoentés et esmaïés quant il le vit aprochier de lui k'il ne fust de .X. autres cevaliers s'il l'assaillaissent [...].

ブレユスはトリスタン殿が彼を撃つべく身を構えてやって来るのをみたとき、盾を見てそれがコルヌアイユのものであることをみてとったので（前日に彼はモルガンのところにおいて、歓待を受けたのだが、モルガンは最近我が身に起こった大きな災難と被害について語ったのだった。ブレユスはその話を重く受けとめ、そんな不思議な話は今まで聞いたことがないといい、その被害をもたらした騎士がどんな盾を持っていたのか尋ねた。モルガンは近くで目撃した騎士たちから聞いた通りのことを述べた。前日にブレユスがモルガンの館で聞いた話から、彼はトリスタンの盾を見るやいなや、それを認めたのだった）、それで彼は、トリスタンが近づいてくるのをみて、騎士が十人襲いかかってくるのより以上に恐れおののいたのだった。

(*Tristan*, t. II, p. 211, § 91)

ここでは、本文の校訂者によってカッコにくくられた部分が、短いながら回顧的物語となっている。第2巻の校訂を行った Marie-Luce Chênerie, Thierry Delcourt らはこの部分について、「この長い挿入は、[……] 少なくとも重い。作者が物語の欠落に気づくのが遅すぎたせいではないか、また、写本を読む者の熟達度に期待しているのではないか」と述べている⁸⁾。しかしながら、まとまった形の回顧的物語に限らず、『トリスタン』では、物語の現在時が、あるいは過去への短い言及、あるいは未来の、来たるべき結末の先取り、あるいは視点を微妙にずらした同一状況の反復などといった作者の介入によって、常に不安定な、流動的なものとして実現されている。こうした文体は、今日われわれが慣れ親しんでいる物語の語り方を基準として、冗長であるとか、未整理であるとかいう評によって、否定的に語られがちだが、こうしたいわゆる「冗長さ」も、

作品中ないし複数の写本中でシステマチックに見いだすことができる限りにおいては、意図的なものとして積極的に評価する必要があるのではないだろうか。上の引用箇所についても、必ずしも作品構成上の欠陥、作者の手落ちとして否定する必要もないように思われる。『トリスタン』の書き手は、『ランスロ』において打ち出された回顧的物語の構造化の手法にたいし、反省、批評を加えたうえで、あえて異なる形式化、あるいは形式化からの脱却を目指している、というふうに評価することも可能だろう。

『ランスロ』における回顧的物語の手法との大きな違いとしては、他にもいくつかの点が挙げられるが、ここでは、そのうちもつとも『ランスロ』との差異が著しいものを紹介する。これは、『ランスロ』には決してみられなかった形式だが、語りのレベルが、一気に過去のエピソードの発端に移行するのではなく、段階的に過去へと遡行していくものである。

Il venoit adonc pensant mont durement par mi la forest. Li esquier venoient devant, et il après, pensant toutes voies a soi meïsmes en tel maniere que, se aucuns le veïst, adonc legierement peüst quidier k'il fust durement courechiés. Et se aucuns me demandoit a coi il aloit pensant si durement, je diroie ce que il meïsmes reconnut puis a autre gent: il pensoit a monsigneur Tristran, ⁽¹⁾quar tout maintenant li estoit avenu k'il s'estoit partis d'une damoisele ki avoit veüe la bataille de monsigneur Tristran et de ches .XXX. cevaliers et avoit veü comment li .XXX. cevalier estoient tourné a desconfiture par les deus et comment des .XXX. en i avoit bien remés u camp dusques a dis que mors, que navrés durement.

⁽²⁾Tout cestui fait avoit la damoisele veü apertement ensi com il estoit avenus et, quant ele encontra Lancelot, ele s'en aloit ansi com toute esbahie de ceste aventure, car ce li sambloit bien trop grant merveille. Lancelos, quant il encontra la damoisele ki encore aloit pensant a cest affaire, le salue et si l'aresté, et cele li rent son salu mout courtoisement: «Damoisele, fait il, de quel part venés vous? Nous savés vous a dire nules nouveles, se Diex vous doinst boine aventure? Se vous en savés nules, si les me dites.— Si m'aït Diex, sire cevaliers, fait la damoisele, nouveles sai je mout merveilleses, les plus estranges et les plus fieres que je onques veïsse a jour de ma vie ne dont onques oïsse parler.— Ha! pour Dieu, damoisele, fait Lancelos, quant vous nouveles savés si estranges, je vous pri que vous les me contés par couvenent que je soie tenus du rendre a vous un gregneur guerredon k'il n'afierte a rendre de ceste bonté.— Ki estes vous, fait ele, sire cevaliers, ki tant estes desirans de savoir ces nouveles?— Damoisele, fait il, je sui uns cevaliers ki ne sui mie de grant affaire. Encore n'ai je mie tant fait d'armes u roiaume de Logres ne en autre lieu que la renommee de ma cevalerie keure encore granment ne loins ne pres. Mais a ce ne regardés mie a ma povre cevalerie, mais regardés a vostre courtoisie et me dites la verité de ches nouveles que vous dites ki sont si estranges et merveilleses durement.— Certes, sire, fait ele, volontiers, puis que je voi que vous estes si desirans du savoir. ⁽³⁾Or sachis que je passioie ore endroit par cele forest, si trouvai en

un vachel la plus estrange bataille que vous onques veüssiés, car doi cevalier se combattoient illuec encontre .XXX.; et tant dura cele bataille que li doi cevalier menerent par fine force les .XXX. a desconfiture; et tous les eüssent mis a mort, s'il ne s'en fuissent adonc fui. Ce est l'aventure que je vous di que je vi, si estrange et merveilleuse que onques ne vi aventure plus fiere. — Or me dites, damoisele, fait Lanselos. Et savés vous ki sont li doi cevalier ki en tel maniere menerent a desconfiture les .XXX.? — Si m'aüt Diex, sire fait la damoisele, je ne sai ki il sont, et nonpourquant itant vous di je bien que li uns cevaliers des deus n'estoit mie de si grant pooir que je n'aie veü trop de meilleurs; mais li autres estoit tant boins cevaliers, si preus, si emprendans et si aspres que je puis bien dire sans doutance k'il est bien li miudres cevaliers que je veüsse piecha mais. Ce est merveille de sa prouche! Il a vaincus les .XXX. cevaliers par lui tant seulement et non mie par l'aide de son compaignon!》。

^⑫Mesire Lanselos, ki ja avoit de celui fait oïe la nouvele en tele maniere con je vous ai devisé, s'estoit de la damoisele departis et venoit toute la forest pensant mout durement de ceste aventure. Et quant il vint pres du vachel u la bataille avoit esté, pensant toutes voies en tel guise com je vous ai devisé, li compaignon ki venir le voient commencent a parler de lui, et dist li uns a l'autre [...].

〔ランスロは〕 そのとき森の中からひどく考え込みながらやって来た。盾持ちたちを先に歩かせ、その後から道中ずつと考え込みながらやって来たので、彼を見た者がいたなら、彼はたいへん悲しんでいるのだと考えたことだろう。彼がそんなにも考え込んでるのは何事かとお訊きになる方がいれば、私は彼がその後で他の人々に言ったのと同じことを申し上げよう。彼はトリスタン殿のことを考えていたのだった。^⑬というのも、つい先ほど、トリスタン殿と三十人の騎士の戦いを見、三十人の騎士たちがかの二人〔トリスタンとその友人ディナダン〕によって打ち負かされ、十人もが死ぬなり重傷を負うなりしてその場に残された次第を目撃した娘と別れてきたばかりだったのだ。

^⑫娘はそうした次第を全て起こったままにはっきりと目撃し、ランスロと出会ったとき、彼女はその出来事にすっかり驚いたまま立ち去ろうとしていたのだった。というのも、彼女にはその出来事がたいへん不思議なことに思えたのだったから。ランスロはそのことを考えながら道を行く娘に出会ったとき、あいさつをして彼女を止めた。娘はたいへん優雅にあいさつを返した。ランスロは言った。「娘御よ、どちらからいらしたのですか？神があなたに幸運をお与えになれるなら、何か私たちにお話しになることがあるのではありませんか？何かありましたら、お話し下さい。」娘は言った。「神のご加護あれ、騎士殿、私はとても不思議な、今まで生きてきたなかで一度も聞いたことも見たこともないようなとても変わった、とてもすさまじい話を知っております。」ランスロは言った。「ああ、娘御よ、それほど変わった話をご存知なら、お話し下さいませんか。そのご好意に報いられるよう、できる限りのお礼をいたしますから。」彼女は言った。「騎士殿、あなたはどなたですか？この話をそれほどお聞きになりたいなんて。」彼は言った。「娘御よ、私はどうということのない一介の騎士です。ローグルの国でも、他の土地でもあちこちに騎士としての名声をとどろかすほどの武

勲を挙げてはおりません。しかし、私の貧しい巧妙などお忘れになって、あなたの気品にふさわしいように、それほど変わって、不思議だったというお話について本当のところを私にお話し下さい。」彼女は言った。「よろこんで。あなたがそれほどお聞きになりたいのであれば、⁽³⁾お知りおき下さい、私があつた森を通ろうとしておりますと、谷間で貴方もご覧になったことがないような不思議な戦いがありました。といたしますのも、三十人を相手に二人の騎士が戦っていたのです。その戦いの果てには、二人の騎士が三十人を力で圧倒してしまいました。彼らは逃げ出さなかったならば、皆その場で討ち死にしてしまったことでしょう。私がかつたほど奇妙で、不思議で、すごい出来事は見たことがないと申し上げた、これがその次第でございます。」ランスロは言った。「それではおっしゃって下さい。かように三十人を打ち破つた二人の騎士が誰であつたか、あなたはご存知ですか？」娘は言った。「神のご加護あれ、殿よ、私はその方々を存じ上げません。ただ申せますのは、お二方のうちのお一人は、見たことがないほどのお力をお持ちという訳ではございませんでした。しかしもうお一人はたいへんすばらしい、勇敢で、大胆で、猛々しいお方で、私が今までお目にかかつた方々の中では、もっとも優れた騎士であつたと申し上げて間違いございません。かの方の武勇のすばらしかつたことと申したら！三十人も騎士を打ち負かしたのはひとえにかの方のお力によるもので、もうおひとかだのご助力ゆえではございません。」⁽²⁾ランスロ殿は、今私がお聞かせしたようにしてこの話を聞いたのち、娘と別れて、この出来事について深く考えながら森を通つていたのであつた。そうして私がお話ししたようにひたすら考え込みながら、戦いが行われた谷の近くまでやつて来ると、彼らが来るのを見た仲間たち〔アーサー王宮廷からの四人の騎士〕は彼が来るのをみて、お互いに言い合つた〔……〕。

(Tristan, t. II, pp. 150-152, § 54-55)

これはトリスタンがディナダンとともにモルガンの遣わした三十人の騎士を打ち負かした話をランスロが知る場面であるが、引用中点線であらわした(1)の時間——これはランスロが情報をもたらした娘とすでに別れた時点にかかわる——から、下線であらわした(2)の時間——これは娘とランスロが出会つた時間である——、さらに太下線であらわした(3)の時間——これが娘の目撃したトリスタンの闘いの物語となる——へと時間が次第に過去へさかのぼっていくように書かれている。(3)の部分、定型表現を用いた典型的な回顧的物語の形式を踏んでいるが、その前を行く(1)から(2)への移行の部分、一見見ただけではどのように時間が折り畳まれているのか、分かりにくい形となっている。

La u il cevanchoit en tel maniere par la forest et Gouvrenaus aloit toutes voies desloant a monsigneur Tristan, tant com il pooit, k'il ne tenist la compaignie de la damoisele, atant es vous par aventure k'il encontrerent monsigneur Gavain, ki cevauchoit en la compaignie de deus esquiers tant seulement.

Mesire Gavains n'estoit mie tres bien sains a celui point k'il encontra monsigneur Tristan, car (1) tout maintenant s'estoit combatus a un chevalier de Norgales, mout preudome des armes, u il avoit trouvee si grant prouhece et si merveilleuse force k'il

avoient ambedoi laissié la bataille par fin anui et par fin travail : ne li uns ne pooit venir au desus de l'autre pour pooir k'il en eüst, ains s'estoient departi li uns d'une part et li autres d'autre. Et saciés que mesure Gavains avoit receü en cele bataille assés plaies, mais de tant li estoit bien venu k'il n'en avoit nule grant, et toutes votes i avoit il assés perdu du sanc. Pour ce n'apela il pas a cele fois monsigneur Tristran de joust, car il n'en estoit pas a celui point tres bien aaisiés. Et saciés k'il venoit droitement de ciés Morgain, ⁽²⁾u il avoit demouré tout le jour devant. Il avoit bien oï tout plainnement la grant plainte et le grant dementéis que Morgain demenoit en son palais pour ses cevaliers qu'ele avoit perdus, et disoit que ce estoit par Lancelot du Lac. Mesire Gavains li avoit demandé quel perte ce avoit esté, et Morgain li avoit devisee sa perte tout mot a mot et le fait des .XXX. cevaliers et des deus. Mesire Gavain, quant il oï ceste nouvele, il dist que cis fais n'avoit pas esté petis, ains avoit esté bien merueilleus et de haute proueche. Après avoit demandé queus li esqus estoit que Lancelos portoit celui jour que cele bataille avoit esté en tel maniere, et Morgain li avoit devisé tout en tel maniere con li cevalier li avoient devisé [...]

そのようにして、グヴェルナルが[モルガンの侍女に]ついていくべきではないと、できる限りトリスタン殿に不服を示しながらも、三人で馬を進めていくと、偶然にも盾持ちを二人連れただけで道を行くゴーヴァン殿に出会った。

ゴーヴァン殿はトリスタン殿に会ったとき、体調が万全であるとはいえなかった。というのも、⁽¹⁾つい先ほど、ノルガルから来た、たいへん武勇にひいでた騎士と一戦交わしたばかりで、その騎士がたいへん勇敢で、優れた力を持っていたために、二人とも最後には疲労困憊のために休戦したのであった。どちらも相手を打ち負かすことはできずに別れることになった。ゴーヴァン殿はその戦いで多くの傷を受け、幸運にもひどい怪我こそはしなかったものの、ずいぶん多くの血を失ってしまった。そのためにトリスタン殿と出会っても、これほどつらくてはと戦いを挑まなかったのだ。さらに申しあげると、ゴーヴァン殿はモルガンの館からまっすぐここまで来たのであった。⁽²⁾前日彼はその館に泊まったのである。彼はそこでモルガンが、失った騎士たちのことをたいへん嘆き悲しみ、それは湖のランスロのせいだと言うのを聞いた。ゴーヴァン殿はどんな被害を受けたのかと尋ね、モルガンは三十人の騎士と二人の騎士[トリスタンとディナダン]の戦いと、それによって失ったものを一つ残らず語って聞かせた。ゴーヴァン殿はその話を聞き、それはすごい、実にめざましい、たいへんな武勇があったものだと言い、その戦いがあった日こ、ランスロがどのような盾を持っていたのかと尋ねた。モルガンは騎士たちが語った通りを彼に述べた[……]。

(Tristan, t. II, pp. 179-180, § 72-73)

これはやはり同じトリスタンの武勇について、ゴーヴァンがモルガンから聞かされるエピソードを語っているが、ここでもやはり、ゴーヴァンがトリスタンと出会う直前のある騎士との出会いを語る(1)の部分から、その前の日の出来事としてモルガンとの会話を再現する(2)の部分へと、時間が遡行するように書かれている。その上、(2)の部分では、この後、さらに過去にさかのぼっ

て、トリスタンの闘いのありさまについての言及があるので、実際にはもう1段階、過去への遡及がなされていると考えることができる。

こうした時間の遡行は、ここに挙げた二例を含めて、Droz版第2,3巻に三例みられる。こうした回顧的物語の手法は、おそらく『トリスタン』での革新だろう。『ランスロ』においては、回顧的物語は分厚い地層の堆積を一層丸ごととはがしたところにどっしりとした姿を現す、という印象を与えるが、上にみたような『トリスタン』での時間の遡行、一挙に発端まで戻ることをせずに、少しずつ時間軸をずらしていきながら過去へと戻るといった手法は、軟体動物のように不安定で、常にいくつもの時空の間を行ったり来たりしてやまないこの作品のディスコースにはよりふさわしいともいえる。

E. Baumgartnerの《Joseph d'Armathie dans le *Lancelot en prose*》によれば、『ランスロ』の物語は、アリマタヤのヨセフと聖杯という時間の発端と、聖杯の消失およびアーサー王宮廷の崩壊という時間の終端の間にある中間の時間の表現であった。そのかぎりにおいて、潜在する発端から終端へとつながる直線的な時間の流れを保証するために、傍系の時間、傍系の空間の体系的な管理が物語の構成に必要とされ、それが例えば回顧的物語をはじめとする、物語内の時空間構成に関わるいくつかの書法の定式化に通じたと考えることができる。それにたいし『トリスタン』の物語が扱っているのは、そうした時間の流れの潜在的な重層性をもたない、つまり物語の発端がまさしく時間の始点であり、物語の結末がこれもまた正確に時間の終点である世界である。『トリスタン』における、時間の遡行の定式化への抵抗、あるいは、Philippe Ménardが《Chapitres et entrelacements dans le *Tristan en prose*》⁹⁾のなかで指摘したような、目くらましの章立て、交錯技法の使用法、さらには、先に述べたよりミクロのレベルでの物語の時間や視点の揺らぎ、こうしたものは、決して作者の技量が不足しているからではなく、むしろあふれすぎるぐらいの作者の創意が、『ランスロ』におけるようなバックボーンの欠如から、物語の構造についてのより自由な扱いを発想し、また可能にした、と考えることもできるだろう。

（本論文は、国際アーサー王学会日本支部1997年度総会における口頭発表原稿の一部を改稿したものである。）

注

- 1) Colette-Anne Van Coolput, *Aventures querant et le sens du monde*, Leuven, U. P. 1986 (Medievalia Lovaniensia Seris I / Studia XIV).
- 2) *Le Roman de Tristan en prose*, 9vols., publié sous la direction de Philippe Ménard, 1987-1997, Genève, Droz. Tome II, édité par Marie-Luce Chénier et Thierry Delcourt, 1990, Tome III, édité par Gilles Roussineau, 1991. 以下 *Tristan* と略し、出典箇所は巻号、ページ、段落番号の順に示す。
- 3) Alexandre Micha, *Essais sur le cycle du Lancelot-Graal*, Genève, Droz, 1987, p. 130.
- 4) 嶋崎陽一 《La Structuration des récits rétrospectifs dans le *Lancelot en prose*》, 『龍谷紀要』(龍谷大学) 第19巻1号, pp. 87-110, 1997.
- 5) *Lancelot, roman en prose du XIII^e siècle*, éd. Alexandre Micha, 9vols., 1978-1983, Genève, Droz. 以下 *Lancelot* と略し、出典箇所は章番号、段落番号の順に示す。
- 6) J. Rychner, *L'Articulation des phrases narratives dans La Mort Artu*, Genève, Droz, 1970.
- 7) *Ibid.*
- 8) *Tristan*, tome II, p. 401.

- 9) E. Baumgartner, 《Joseph d'Armathie dans le *Lancelot en prose*》 in *Lancelot, actes du colloque des 14 et 15 janvier 1984*, Göppingen, Kümmerle Verlag, 1984, p. 8ss.
- 10) Ph. Ménard, 《Chapitres et entrelacements dans le *Tristan en prose*》 in *Et c'est la fin pour quoy sommes ensemble, hommage à Jean Dufournet*, tome II, pp. 955-962.